12

福岡医科大学創設者・大森治豊

佐藤　裕

明治三六年（一九〇三）三月二四日、「京都帝国大学に第一医科大学と第二医科大学を置き、第二医科大学はこれを福岡に設置する」旨の詔勅が発せられ、国立大学が福岡の地に誕生した。この大学誘致の中心人物が、大森治豊である。大森は上山藩医大森快春の長男として嘉永五年江戸に生まれたが、父快春とともに上山に移り住み藩校明新館に通った。長じて上京し（明治二年）大学東校に入学、明治一二年に東京大学医学部を卒業し、同級生二十名とともに日本初の医学士となった。

明治一二年、請われて県立福岡医学校に熊谷玄旦とともに赴任した。当時の福岡医学校附属病院長が、明治九年東京医学校卒の大河内和（かず）であった。明治一三年には、福稜医会を創立した。明治一六年の一月に大河内が急逝したため、大森らが後を引き継いで医学校と病院の運営にあたった。

明治一八年、運営費削減案が可決され、医学校は存亡の危機に陥るが、この年、大森治豊と池田陽一とにより、県立病院において帝王切開が成功裡に行われるという快挙があったこともあって、それ以後廃止の声は止む。

ところが明治二〇年、「明治二一年以降地方税による府県立医学校は廃止する」という勅命が発せられたことを受けて、大森は県内の開業医らの応援を得て、明治二〇年四月自らが院長となって県立福岡病院を再出発させた。しかし、病院経費が県費を圧迫するという批判が根強くあるので、大森らは西洋医学の恩恵を県民に還元し、また県立病院の医学水準を維持しつつ、県下の開業医を再教育する目的で巡回診療を行ったり、玄洋医会を結成するとともに（明治二二年六月）、医学雑誌「杏林の栞」を発行した。この杏林の栞の第一号には熊谷玄旦の十二指腸虫病治験とエワルド氏胃病診断法講義、大森治豊の血友病実験など、質の高い論文が掲載されている。

明治二四年八月、大森は北里柴三郎らと時を同じくして、内臓外科を推進した功績により大学評議会の推薦を

受けて、医学博士の学位を授与されている。大森が先駆的手術を成功裡に行い得た背景には、シュルツェ譲りの防腐手術を実践していたということがある。

明治二九年、手狭になった県立病院を移転すべく度々上京していた大森は、東京大学の同窓生らと集うことがあり、外科学会創設を首唱するようになった。県立病院は、それまでの実績が評価され、これに大森等の周旋が功を奏して、明治二九年六月千代の松原の地に新築移転することになる。

明治三〇年には、外科学会創立準備会を発起し、明治三二年四月に第一回日本外科学会を東京にて開催するに至ったのである。

千代の松原の地に最新鋭の設備を整えた病院を発足させた大森の気持ちの中には、「国立大学をこの博多に誘致したい」という情熱があったようで、開院一周年記念式典の演説において、「益々進んで拡張の方針をとり、九州大学設立の暁までには医科大学たるに恥じざる位の進歩をなし、患者を収容せざるべからず」と語っている。そして福岡市民の声援や地元の財界の協力を得て、明治三六年に「福岡医科大学設置」の勅命を勝ち取るのである。開学にあたって大森は、東大から新進気鋭の医学者を招聘するとともに、国内の高等学校から俊英を集めた。以後、大森等は心血を注いで学生教育にあたった。

かくして明治四〇年（一九〇七年）一二月、京都帝国大学福岡医科大学の第一回目の卒業式が挙行され、五八名の医学士が誕生した。

明治四五年二月一九日、かねてから闘病中の大森は稲田内科において息を引き取り、病理解剖によって「動脈硬化性萎縮腎」が認められた（享年六一歳）。二月二四日に福岡全市をあげての葬儀が執り行われ、その会葬者は二千名を越えたと報じられている。遺骸は医学部に隣接した崇福寺墓地に葬られている。

（九州大学医学部百周年史編集委員）